

WEB公開許諾がない文章です。

## 伎樂についての考察

出野寛人

伎樂と云う言葉は聖典やその他でよく見受けるところである。我口では伎樂のことについては、推古天皇二十年（六一三）に百濟の味摩之が歸化して伝えている（即ち、日本書紀卷オニ十二推古天皇章には

「百濟の人、味摩之、歸化して曰く、『吳に學びて伎樂の傳を得たり』と、則ち柁井に安置らしめ、少年を樂

く伎樂儀を習はしむ。於是、眞野首、弟子、新漢人、有文の二人、習ひて其の儀を伝へり。比今の太市首、辟田首等が祖なり」

とあり、又聖德太子伝には

「二十年秋夏五月（中略）百濟味摩之、化來白日尊子

受口得伎樂舞、則置柁井村而樂小年令習伝、太子奏

勅諸氏貢子弟壯士令習吳諷又下令天下擊鼓習舞」

と書いてあり、味摩之が歸化して柁井にて少年に伎樂

傳を教へたことがわかる。そうしてこれらは諸佛會の

僅しに用いたものである。

伎樂と云うのは佛教聖典の慣用語であつて、広く歌

舞を指し特定の内容をもたないものである。しかし当時

内外の樂が多いのにも拘らず、これを伎樂と云つたの

は佛教と深い關係のあつたことを示す（岩橋小波太氏

説）この説から見ると味摩之の紹介したのは佛教的の

ものであつたと云うことがわかる。

伎樂と云う語は聖典を思ひ起こさうと出ている。その内

二、三を見るに、觀無量壽經には

「其樓閣の中に無量の諸天ありて天の伎樂をなす、ま

た樂器ありて虚空に懸處せり」

とあり、又、無量壽經下卷には

「一切の諸天、みな天上百千の華香、萬種の伎樂を獻

て、其の佛および諸の菩薩声聞大衆を供養す」。

とある。又、法華至普賢菩薩現発品には

「是の人命終して當に勿利天上に生ずべし。是の時に  
八万四千の天女、衆の伎衆を作し、来つて之を迎え  
ん」

「無量百千万億の種々の伎衆を作す」

又、具宝塔品には

「余の諸の天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・  
緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の千万億の衆は、一切  
の華・香・瑠璃・珊瑚・伎衆を以て宝塔に供養し、  
恭敬・尊重・讃歎したてまつる」

又、法師品には

「若し善男子、善女人、法華至の乃至一句に於ても受  
持・讀誦・解説・書寫し、至卷を種々に供養するに  
華・香・瑠璃・珊瑚・鉢香・燒香・繒蓋・幢幡・衣  
服・伎衆を以てし、合掌恭敬せん」

又、譬喻品には

「諸天の伎衆百千万種・虚空の中に於て一時に俱に作  
し、衆の天華を雨して是の言を作さく」

等々に記してある。こ小らの聖典の中の言より見るに、  
伎衆には非常に多くの種類のあつたことがわかる。又

こ小らの伎衆は天女がおとつたことも、その他色々の  
諸人がおとつたこともわかる。又、佛を供養するのに  
おとつたこともわかる。それに又、法華華至の分別功  
徳品の

「華・香・瑠璃・鉢香・鉢香・燒香・衆鼓・伎衆・鼙  
笛・笙・篳篥・種々の舞戲あり、妙なる音声を以て歌頌  
讃嘆するなり」

などよりして舞戲に属したことがわかるのである。

伎衆に關するくわしい記録は「教訓抄」である。こ  
の教訓抄は天福元年に伯近真が子孫のために書いたも  
ので衆書の中ではもつとも古いものである。しかし伎  
衆が我口に伝承してより約六百七十年後であるから伝  
承當時とは大却變化していることは当然である。けし  
どもこの書より當時をしることはできる。「教訓抄」  
より少く見るに、

一、伎衆

四月八日佛生会日七月十五日妓樂会日

此笛大坂府生則方之流也一乃伯行光、二乃尾張則天 舞者

東大寺職掌紀氏伝之興福寺大僧并夜叉等役等類也

此舞者聖德太子之御時、從百濟口被渡舞師未摩子云

所伝區妓衆也。而石老云楊梅神御相伝云可尋之

先稱取區洗漏音次調子謂之區行音或區行相子日云々 是以爲

行道・立次第者。先師子次踊物、次笛吹、次囃子、

次打物 三鼓二人 銅拍子二人

先師子舞

其詞壹越調音 似後至有喚頭 白記 破喚頭三返 高舞三下三返 何等

次吳公 高持

可吹三返 盤涉調音吹之 紀氏舞人說舞人出舞臺向衆屋

笛吹由スル時。笛吹也 又笛吹ヨミスル時笛ヲ止セ

次國榎羅 次金剛

可吹三返 盤涉調音吹也 或目錄前專唐サトウ名アリ是 不知可假爾也

謂之ケラハミ 拍子十三可吹三及而近代雖有別曲

吹置城樂破也 舞人走テ舞

次彼羅門

謂之ムツキヤラヒ 又名持悅 拍子工可吹三及 壹越調

音吹之

次龍

拍子十可吹三及 壹越調吹之 先ツ五セ燈籠ノ前立ツ

三人打輪持

其後、舞人二人出テ舞。終扇ヲツカヒ

マカケヲ指（一本指）テ、五セ之内二人ヲ、ケサウス

ル

次力上 ナタタキテ出金剛叩ウ

壹越調音 火急吹之可吹三及 謂之マラツリ 舞 彼五セケサ

ウヌル所 外道寛當ノ カウ伏スルマネ也、マラ

カタニ纏ヲ付テ引テ、件、ヲ打ヲリヤウノ

ニスル舞ニ舞也 或人云緩廻件ノ御申也、ヨハヒ

ニマワスルト云ハ是云、

次大瓶

又名繼子 序吹物可吹三及 平調音吹之 老女導也 子各

ニ人ヲクシテ 睥ヲオサシ、膝ヲウタセテ、佛前ハ參

詣シテ、左右脇ニ子ヲキテ、佛ヲ礼シタマツル

次醉胡

又、醉胡五ト云、刀福ト云、人れト云、ハラメキ

ト云、

壹越調音 可吹三及

雖有別曲 近來用承知衆 先張則成號 三思拍子吹之

次武德樂

壹越調物也、勿舞故ニカ近來不用之 天王寺今無之

已上十般樂如此、有光家ニハハ伎樂云、其故者龍

齋カ士ヲハ一曲ニスル故ナリ、於武德樂雖入目錄

自音不舞之

久安五年佛生会ニハ、尾張則成ト清衆島則ト二人吹

了

件爲則ハ兼師寺衆人 出德得衆弟子

長安二年兼元吹之 日記明白也

予者、則成ニ令相伝待也、ヲノツカラ彼自光之流ノ

絶ム時料、更ニ競ヒ吹カム料ニハアラス、此様ヲ心

エヘシ

白記曰

聖德太子我朝ニ生來シ給テ後、自百舌口渡舞師 味摩子 伎樂ヲ宣シ留テ、大和口彌寺一具、山城口



水登寺一具、攝津口天王寺一具、所寄進也

其後百餘年之役、七大寺移置余者諸事皆絶了、東大  
聖福兩寺殘留、又、天王寺、住吉社如形有千今云云  
又雅無習と与ミ給テハ公家一具被寄進、南無ハ此二樂人  
天王一具被寄置、彼寺佛手佛事供養料、今案ハ舊人衆  
住ミ、寄進後三度絶了

と言いてある、此の伯近眞は算学の士であつて後日、  
この伎衆の絶へることをうかいて、自分の職務以外の  
伎衆をも至張則成より相伝してゐる、又、久安五年は  
此の伯近眞の此著の天福元年より約八十五年前のこと  
である、又、長承二年はそれより約十五年以前であつ  
た、共に其の当時の伎衆は十曲程にへつてゐたらしい、  
味摩之が伝えた頃は非常に盛んであつたと思われ、  
即ち舞衆に使用した面は約二百箇も正倉院に現存して  
ゐる、これを覚えてもいかに盛んであつたかがわかる、  
味摩之の傳口から約百三十年をへた天平十九年録上の  
大和口法隆寺の「資財帳」の記載も伎衆百とあり何處  
具は次の通りである。

伎衆 壹拾壹具

師子戲頭 五色毛 師子四面 衣服具

治道二面 衣服具 吳公壹面 衣服具

金剛壹面 衣服具 迦樓羅壹面 衣服具

毘薩壹面 衣服具 力士壹面 衣服具

婆羅門壹面 衣服具 孤子參面 被服具  
醉胡七面 衣服具

と記してあり、現在でも伎衆の面は正倉院に百六十余  
面、法隆寺に三十余面残つてゐる、

當時は伎衆の舞に合つた衆があつたのであらうけれ  
ども何時か絶えて、唐の雅衆を使用するにいたつたの  
である。

## 佛教に於ける民間行事に就いて

特に灌佛会を中心として

中西 恭 雄

佛教に於ける民間行事と云う言葉に二つの意味が考へ  
られる、その内一つは民俗信仰と呼ぶもので、一  
定の教理や教祖を持たない日本固有の信仰で、佛教渡  
来後、多分に佛教的な色彩や影響を受けたもの、元か  
らあつた行事が何時のまにか佛教の行事と化したもの  
であり、今一は佛教渡来後、上流階級（朝廷、貴族、僧侶  
等）の間に流行なれした行事が次第に下層階級に鎮下し  
て行つたもので、それが一般化され、庶民信仰と云う  
表現で多く云はれてゐる広い範圍の層で行はれてゐる  
行事である。